

## 佐佐木幸綱「俺は行かない」について 御手洗靖大

『短歌研究』九月号では、岡井隆追悼特集が編まれた。御用掛である篠弘のインタビュと佐佐木幸綱の時評「俺は行かない」の全文が掲載されている。やはり、岡井の歌壇史的評価を語る上で宮中歌会始選者就任事件は避けては通れないということだろう。

宮中歌会始は、国民から広く短歌を募集・選別した後、皇族の「御製」を加えて天皇の面前で披露される新年の皇室行事である。荘厳な儀式は、「天皇制」を再確認させる場といえる。歌をよみあげる披講諸役は旧華族組織からと決まっており、三度披講される天皇の「御製」には、出席者は起立して聴くことになっている。今年の歌会始の前に、幸綱の時評から思うことを書いてみたい。宮中歌会始と現代短歌の繋がりは、昭和二年（一九四七）、戦後第一回の歌会始からであろう。歌壇から選者を登用し、佐佐木信綱、窪田空穂、斎藤茂吉の三人がその任に就いた。

選者就任については、それぞれのホームとなる結社誌の反応が興味深い。戦後初の歌会始について最も力をいれて周知していたのが信綱の「心の花」である。選者の決定と詠進歌の要領が発表された昭和二十一年一〇月号には、巻頭に付録として歌会始の要領（図書頭大場茂行執筆）と信綱の文章が挟み込まれている。信綱は、選者として天皇から「歌道をとほして、皇室と國民との結びつきに就いて、一層努力するやうに」との言を賜ったと報告して

いる。一二月号巻頭では、信綱の月詠「日本國憲法發布の日に」と分けて、「やまと歌の道」と題した選歌中の詠四首を飾る。

さらに、歌会始後に発行された三月号では、巻頭に御製を含めた全歌、次ページに選者としての体験談を、さらに、村田邦夫による「「あけぼの」の選歌よみて」と題された特集評論を置く。

空穂の「槻の木」では、昭和二十一年一〇・一一月号の巻頭に空穂の名義で選者就任と、信綱の文章にもあった、天皇の言葉を報告する。天皇が三人の新選者にかけて言葉、空穂は「作歌の母胎である國民觀念その物の涵養に努力せよとの大御心」と解釈する。空穂の解釈は、明治生まれの歌人たちが戦後と天皇、そして短歌をどのように見ていたかを示すヒントになろうと思われる。

歌会始後の二・三月号では、編集の都合なのか、空穂の評論「萬葉集概説」の文章中に埋め込まれてしまっている。主宰が空穂ではない「槻の木」での扱いは、「心の花」ほどではないようだ。

「心の花」と対照的なのは茂吉の「アララギ」である。昭和二十一年九月号の末尾に、詠進要領と茂吉の選者就任が七行で記されるのみである。また、管見の限りでは、御製を含めた詠進歌の掲載がなかった。「心の花」から見ると、「アララギ」は冷静とも言える。当時の編集発行人が茂吉ではなく、土屋文明であり、茂吉は未だ疎開中であつた。この事とも関連があるのかもしれない。

戦後最初の歌会始に対する「心の花」、そして信綱を考えながら、私は、約半世紀後の幸綱の言を読むのである。「作歌の母胎である國民觀念その物の涵養」のために「天皇制」に包摂される短歌を、幸綱は宿命としてとらえつつ、警鐘を鳴らす。これは、岡井ではなく、自身の祖父信綱を見ての言とも考えられるのではないか。